

三木清著「読書と人生・如何に読書をすべきか」新潮文庫、新潮社、1974年10月30日刊を読む

開倫塾

塾長 林明夫

<如何に読書をすべきか>

- (1) ①「まず大切なことは、読書の習慣を作ることである」
②「人生置いて、ある意味では、習慣がすべてである」
③「ひとたび読書の習慣を得れば、習慣があらゆる情念を鎮めて（読書がしたい気分が出てくる）」
④「実をいうと、習慣こそ情念を支配し得るのである」
⑤「読書の習慣を得るには、勇気が必要で、まず読書をし始めなくてはならない」
- (2) ①「読書は一種の技術である」
②「自分自身の読書法を見出すためには、まず、数多く読まなければならない」
③「濫読（らんどく）を恐れるな」
④「しかし、濫読に止まるな」
⑤「濫読は、それから脱却するための、濫読である」
- (3) ①「如何に読むべきかという問題は、何を読むべきかという問題と関連している」
②「何を読むべきかを知るには、よい本を読まなければならない」
③「ひとは、ただ、よいものを読むことによって、よいものと、悪いものを見分ける目を養うことができるのであって、その逆ではない」
④「よい本は、必ずしも、読みやすい本ではない。」
⑤「よい本は、まず、古典である」
⑥「古典を原典で読むことから始め、愛読書を見つけよ」
⑦「愛読書を有しない人は、思想的に信用できない人である」
- (4) ①「正しく読め」
②「正しく読むためには、穏やかに読まなければならぬ」
③「自分の身に着けようとする書物は、穏やかに、どこまでも穏やかに、そして、初めから終わりまで読まなければならぬ」
④「穏やかに読むということは、その真の意味においては、繰り返して読むということである」
⑤「繰り返して読むということは、細部を味わうために、必要である」
⑥「繰り返して読むことは、読書において、発見的であるために、特に要求されている」

<コメント>

これが、戦前・戦中を代表する思想家、三木清の「ふかい、思索と人生に相渉る（あいわたる）読書論」です。

以上、161～162ページの「解説」から、書き写しました。

三木清は、終戦1か月後の、1945年9月26日、獄中で死亡、享年、48歳。